

## スペイン語VN複合語の意味について

El estudio semántico de la composición española de verbo y sustantivo

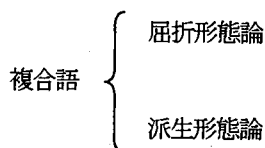
岡見 友里江

Yurie OKAMI

### 1. はじめに

スペイン語の複合語は日本語・英語などに比べると生産性が低いとされてる。しかしその中で唯一高い生産性を見せるのは、動詞+名詞の複合語である。さらにこのタイプの複合語は、その意味において構成素の和からは出てこない比喩的な意味を持つものが多い。本稿では、この比喩的な意味がどのように派生されるのか、私たちがこれらの意味を理解していく過程、そしてこれらの比喩的な意味がどのような機能を持っているのかについて、主に楠見（1995）の理論を通して見ていく。

形態論には大きく分けて屈折形態論と派生形態論の2種類がある。派生形態論は語彙的形態論、または語形成ともよばれ、主として個々の語自体における変化について扱い、その語彙特徴と関連している。一方屈折形態論は文中において他の語との関係で形が決まり、文法的特徴と関連している。



### 2. 語形成と複合語

スペイン語における語形成過程のひとつ、複合語は英語や日本語と比べると生産性が低いと言われている。並木（1986）は複合名詞の大きな特徴として複合語自体がさらに大きな複合語の基体となる“くり返し性”を挙げている。たとえば英語では以下のように複合語を生成していくことができる。

- (1) a. student film society
- b. student film society committee
- c. student film society committee scandal
- d. student film society committee scandal inquiry

(Spencer, 1991)

これに対して、日本語も同じように複合語を作っていくことができる。

- (2) a. 学生映画会
- b. 学生映画会委員
- c. 学生映画会委員スキャンダル
- d. 学生映画会委員スキャンダル調査

(筆者訳)

このような複合語をスペイン語に翻訳していこうとすると理論的には前置詞“de”を必ず用いなくてはならなくなる。勿論スペイン語にも、同じ様な語の使用を避けようとする傾向が働くのでこれらを翻訳しようとする以下のようなになるだろう。

- (3) a. sociedad filmica estudiantil
- b. comité de la sociedad filmica estudiantil
- c. escándalo del comité de la sociedad filmica estudiantil
- d. investigación del escándalo del comité de la sociedad filmica estudiantil

(筆者訳)

いずれにしても前置詞“de”を介さないと複合をのばしていくことはできない。つまり、“de”を用いた点で純粋な語ではなくなり、句になってしまう。

しかし、スペイン語の複合語で生産性が高いものの一つにV-N複合語がある。その形態的特徴について、まず見ていこう。

### 3. 複合語の形態

#### 3. 1 動詞の形態

V-N 複合語の第1要素は動詞、第2要素は名詞である。この動詞の形態についてはさまざまな議論がある。Francisco Ynduráin (1964)は“第1活用の動詞(-ar)が支配的”であり“動詞の時制は直説法現在形”であり“習慣的なアスペクトを持つ”としている。M. A. Ezquerro (1993)は“第1要素の動詞がどんな形をしているかについては意見が分かれるところ”だとし“ある人たちにとっては命令形、ある人たちにとっては直説法現在形、そしてある人たちにとっては、動詞語幹”であるという。直説法現在形の根拠として形容詞句を使つての書換えをあげている。たとえば、

- (1) cascanueces = un instrumento que sirve para cascar nueces
- sacasillas = una persona que se dedica a sacar sillas
- salvamanteles = un objeto que se emplea para salvar manteles

(Manuel Alvar Ezquerro, 1993)

というように、複合語が現在形を使つてパラフレーズすることができることを挙げている。しかしこれだけでは説明できない例も勿論多い。つまり

(2) chupatintas ≠ una persona que chupa tintas

rompecabezas ≠ un objeto que se emplea para romper cabezas

また M. A. Ezquerria は、現代の語形成では直説法が好まれるとしている。それは人々がこの構造を動詞+直接目的語、または動詞+間接目的語と解釈し易いからである、としている。

ここでは明らかに命令形をとっているものを除いては動詞の直説法現在三人称単数として考える。

### 3. 2 名詞の数

名詞の数については高垣が(1984)で挙げた規則でほぼ説明できると思われる。

① 名詞が物質、抽象、集合名詞であるかもしくは、加算名詞でも単一性が弁別的である場合→単数になる

② 加算名詞は複数形が無標形であるが、さらに双性・複数形を表現する場合→複数形になる

高垣(1984)

高垣が挙げた例外としては chupaflor, tragavenado, arrojallamas, chupatintas, parabrissas などがある。

また単複両形のものとしては azotalengua(s), buscavida(s), engañamundo(s), guardabosque(s), lameculo(s), pasamano(s), pasamontaña(s), portálampara(s), portaobjeto(s), sacadiner(s) など。単複両形を許すものが少なくないということからも名詞の数についてはゆれがあるといえるだろう。

### 3. 3 複合語の構成

次に、複合語内部の構成はどうなっているのだろうか。可能性としては以下の3つが考えられる。

① 命令形+呼格 andaboba, miramelindo

② 自動詞+(前置詞)+名詞 girasol, andarrios

③ 他動詞+直接目的語 matasanos, portavoz

このうち、③を除いては現在ではほとんどその生産性を失ってしまっていると思われる。Lloyd は“動詞の補部はたいてい動詞の目的語であるが、いくつかの例においては呼格であるものもあり、そこには隠れた命令(implied command)が向けられている。そのような場合には名詞要素は単数形をとる:bailabuena, pasabola, cantagallo…”と述べている。

現在でも活発な生産性をみせているものは③の他動詞+直接目的語である。

### 4. 複合語の意味——先行研究

複合語の意味を扱った先行研究というものはあまり多くないがここでは、この研究を行うに当たっ

て出発点とさせていただいた高垣（1984）についてまずみていきたいと思う。

#### 4. 1. 高垣（1984）

高垣（1984）は語形成における一連の研究の中で複合語、（特にV+N, N+N）について形態、意味、構成などの点から網羅的に研究している。本稿ではそのなかからVN複合語の意味とその分類について略述したい。

高垣によると従来の変形からの派生の他に比喩（特に換喩）との関連からVN複合語の意味を捉える方法も存在するという。そしてここで用いる換喩の定義として、佐藤（1978）を引用している。

『ある1つの現実Xをあらわす語のかわりに別の現実Yをあらわす語で代用する言葉のあやであり、その代用法は事実上、または思考内でXとYを結び付けている近隣性、共存性、相互依存性の絆に基づく』（佐藤、1978）

しかし具体的にはどのような代用法がVN複合語の意味を構成している換喩において用いられているのか、近接性、共存性、相互依存性の絆とはどのようなものかについては述べられていない。高垣は

『abrelatas などVNが対象物の典型的機能・行動を表現しているとするならば、一種の換喩表現と拡大解釈してもよいのではなかろうか。「カンヲキル」ことは《カンキリ》の最も近接した行動内容である。』（高垣1984）

と述べているだけである。

さらに高垣は『形式が指示物の実態を直載に表現している場合これを『透明』な形式であるとして主要なVNを一覧表に』している。縦は透明性（transparency）の尺度で、下に行くほど形式と内容のずれが大きくなる。

最後に結論として高垣は、『不透明なVN複合語には意味分野に拘らず共通して「ユーモア」が感ぜられ、これは認識の誇張、即ち比喩性の高い換喩に起因する』と述べている。つまり、高垣の説によるとVN複合語の意味は「換喩」に起因しており、さらにその換喩性というものには段階があり、透明な形式（主に道具など）、半透明の形式、不透明な形式というように分類でき、不透明な形式に近づけば近づくほど対象物（意味）とVN複合語（形式）のずれが大きくなる、ということになる。

この説に対しここではもう一度「換喩」という概念を捉え直し、V-N複合語の意味が本当にすべて「換喩」に還元できるのか見ていきたい。特に問題としたいのは高垣でいう透明な形式である。「カンヲキル」ことと「カンキリ」の関係が本当に換喩といえるのかどうか。次に、ここで「比喩」というものを捉えていく理論を一つ取り上げようと思う。

#### 5. 比喩の意味構造モデル——楠見（1995）

比喩に関する研究はこれまでに多くあるが、ここでは、楠見（1995）の理論を用いてV-

N複合語の意味を考えていきたいと思う。

楠見は、認知心理学者の立場から比喩の処理過程の解明を通し、人の知識獲得や知識の利用過程を解明していこうとしている。ここでは主要な比喩の意味構造を仮定し、その処理過程（理解・よさの評価・記憶・生成）を実験的に検討している。

まず楠見は比喩の持つ役割として、以下の2つを挙げている。

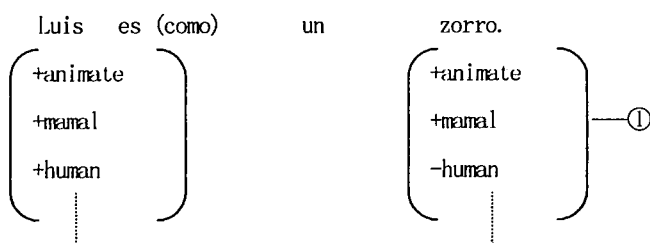
- 未知の対象を既知の対象でたとえて新しい知識を獲得する。
- 既知の対象を既知の対象でたとえて既知の知識を修正する。

(楠見 1995)

この2つの役割を念頭において直喩・隠喩からみていく。

### 5. 1 直喩・隠喩の意味を支えるカテゴリーの意味と情緒・感覚の意味

まず次の例文“ルイスはきつねのようだ”を考えてみよう。私たちが最初にこの文を聞いた時、まずはじめに、以下に示すような①の意味のまとまりに基づいて、文字どおりにこの文を解釈しようとする。



つまりルイスは動物であり、哺乳類であり、人間である。一方きつねは動物であり、哺乳類であるが人間ではない。ここでまず私たちは、文字どおりの意味における不一致に遭遇するのである。

このように“ルイス”や“きつね”が持つ、対象の分類に関わる辞書的な意味、つまりレキシコンに記載されている意味を楠見は“カテゴリーの意味”と名づけた。このカテゴリーの意味は生物学的に規定されておりそれゆえ例外はない。

さて、この文を解釈する次のステップとしてカテゴリーの意味における不一致が発見されると、次に私たちはこの文を比喩的に解釈しようと試みる。その際に関係してくるのが②で表されているような意味なのである。

つまり、“きつね”と私たちが聞いたときに私たちの中に引き起こされる、たとえば、その物の持つイメージなどに関する意味である。これを情緒・感覚的意味と名づけ、楠見は以下のように定義している。

#### カテゴリー的意味

対象の分類にかかわる辞書的な意味

#### 情緒・感覚的意味

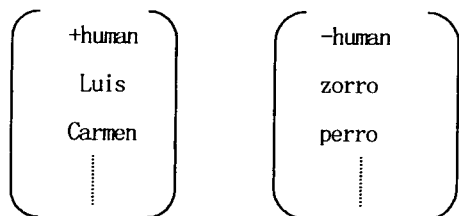
受け手が対象に接したときに引き起こされる感覚や、感情に関わる意味。情緒的意味体系、信念体系として知識のなかに貯えられる。

(楠見 1995)

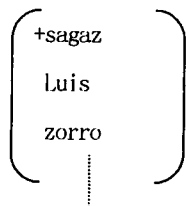
ここまでをまとめるとまず私たちは、与えられた文を文字どおりの意味に解釈しようと試みる。そこでカテゴリー的意味の中で不一致が発見されると、次に私たちはルイスときつねに共通する意味、つまり情緒・感覚的意味を発見しようとする。そしてたとえば“ずるがしこい”という共通の情緒・感覚的意味を発見して、この文の理解を達成するのである。

この文の処理過程でカテゴリー的意味のまとまりを“通常のカテゴリ”といい、情緒・感覚的意味の一致により作られたカテゴリをアドホックカテゴリとする。

ー共通のカテゴリ：カテゴリー的意味によるまとまり



ーアドホックカテゴリ：情緒・感覚的意味によるまとまり



比喩的な解釈は、たとえるものととえられるものが共通の情緒・感覚的意味により一つのアドホックカテゴリを形成することにより達成されるのである。このアドホックカテゴリは、文脈の影響を受け、その場その場でたとえるものととえられるものにみあったカテゴリを柔軟に作り出して行くという点で、まさにアドホックなのである。

次にこの2つのカテゴリの特徴をまとめておく。

“2種のカテゴリの比較”

通常のカテゴリ	アドホックカテゴリ
カテゴリの潜在形	カテゴリの表現形
外界世界や語彙体系を反映	人間主体と外界の相互作用によって形成
知識に貯蔵	知識から推論によって導出
汎用的	目標指向型
文脈自由	文脈依存型
提喩	直喩・隠喩

(楠見, 1995)

5. 2 換喩の意味を支えるスクリプトの意味

次に換喩の場合を考えてみよう。

ヤコブソンは、隠喩は類似性に基づき、換喩は隣接性に基づくとした。前述の佐藤（1978）でもこの意味においての近接という概念がでてきている。この隣接性はおおよそこれまでの研究において、作者と作品、容器と内容、道具と本体、原因と結果などといった手段であらわされてきた。

それに対し楠見は換喩の隣接性は次の2つで捉えられるとしている。

- 空間的隣接性…赤頭巾ちゃん-赤頭巾をかぶった女の子
- 時間的隣接性…杯を傾ける-酒を飲む

例) 徳利を手にとる→徳利からお猪口に酒を注ぐ→杯を傾ける→酒を飲む

空間的隣接性の方には問題はないだろう。つまり、たとえるものととえられるものが実際に隣接していることで、たとえば“赤頭巾ちゃん”で“赤頭巾をかぶった女の子全体”をあらわしている。それでは時間的隣接性の方はどうであろうか。この例としては“杯を傾ける”を考えてみよう。“杯を傾ける”でもって“酒を飲む”またはそれに付随する“友人たちとの歓談”などを意味するためには何と何が接していると考えのだろうか。

楠見は比喩を捉えるための意味の3番目として、スクリプトの意味を定義している。これは私たちが杯を傾けると聞いたとき、私たちはそれに伴う場面のつながりを想起することが出来ることに基づいている。つまり、徳利から酒を注ぎ、杯を持って傾けながら、友人たちと楽しく酒を飲むということを想起することができる。このような場面のつながりに関する意味をスクリプトの意味とする。時間的につながったスクリプト（場面）のある一つでもって、他の場面をあらわすことが出来るという

考えである。これを時間的隣接性と考えれば、換喩と捉えることが出来る。

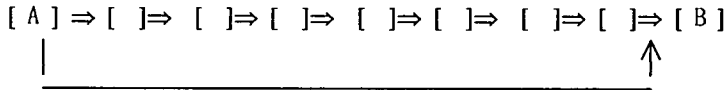
スクリプトの意味

場面とその連続からなるスクリプトに関する意味

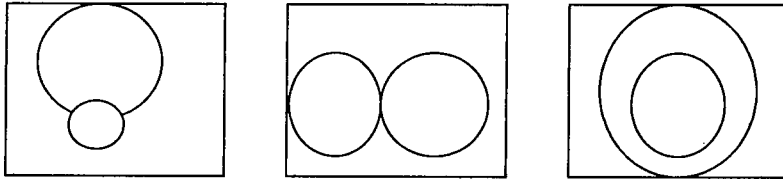
(楠見 1995)

これらの隣接性を図に表していくと、以下のようになる。

時間的隣接性

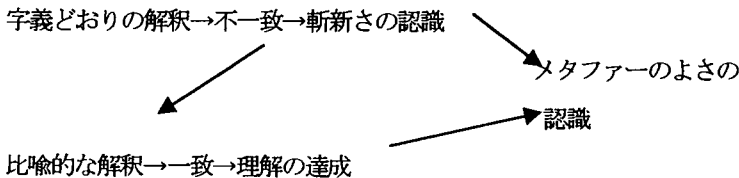


空間的隣接性



これまでのことをまとめると、私たちが比喩を理解するプロセスは以下のように示される。

<メタファーの認知プロセス>



このうち、比喩的解釈にうつつてからアドホックカテゴリを形成して情緒・感覚的意味の一致点を見つけるまでの処理が長ければ長いほど、つまりたとえるものととえられるものとのカテゴリ的意味の距離が長ければ長いほど、メタファとしての斬新さが高まる。逆に、これらの距離が小さければ小さいほど理解しやすいメタファということになる。そしてこの斬新さと理解のしやすさがいまっで、メタファのよさを決定している。

## 6. VN 複合語の意味の分析

つぎにこれらをふまえて、スペイン語におけるV-N複合語の意味をみていこう。

まず、VN複合語の意味が本当に換喩に還元できるのかを考えていく。

高垣は“カンヲキルコト”と“カンキリ”との間に隣接性をみとめている。しかしこれら2つの対象に伴うカテゴリ的意味も、情緒・感覚的意味も、スクリプトの意味もまったく同じであり、唯一



の違いとしてはそれが動詞句であるか名詞であるかということだけである。さらにこの2つの間には楠見が比喩の機能としてあげた2つがみられない。換喩はあくまでもあるものを他の隣接したものであらわすこととするなら“カンキリ”と“カンヲキルコト”との関係を換喩と考えることは出来まいだろう。そこには既知の知識の修正も、新しい知識の獲得もないからである。つまりこのV-N複合語は、まずそのものの存在意義としての機能があり、それを命名するためにその機能を名詞化したとは考えられないだろうか。例えば、缶を開けるための道具が必要となり、それが完成したときにその機能を名詞化して“カンキリ”という名詞ができたと考えるのである。この意味で、換喩というよりは動詞とその目的語というV-N複合語が持つ形態的特徴とその生産性の高さが“カンキリ”の意味に貢献していると思われる。

こう考えていくとV-N複合語のうちこのようにまず機能があつて、その機能が名詞化されたものは高垣の言う換喩に基づく透明なカテゴリではなく“命名”というカテゴリに入れられるのではないかと思われる。

このタイプの例としては以下のものがあげられるだろう。

◎命名タイプ—*abrelatas* (缶切り), *sacacorchos* (コルクの栓抜き), *tocadiscos* (レコードプレーヤー), etc.

次にもう一つの意味のタイプを見ていきたいと思う。

ここに含まれるのは命名タイプ、つまりV-Nであらわされている機能がそのものの名前となっているもの以外である。このタイプは語源的に *pinchauvas* (ぶどうひろい=役立たず) タイプと *chupatintas* (インク吸い=事務員) タイプの2種類に分けられる。*Pinchauvas* はV-Nであらわされる事柄が実際におこったり、その動作をしたりしていたもので、*Chupatintas* タイプはそのあらわされる動作・機能が比喩の創造者のまったくの空想または想像から発したものである。しかしこのどちらもその意味の派生のシステムは同じであろうと考えられる。

例えば *pinchauvas* というV-N複合語を考えてみよう。もしこの単語を文字どおりにとれば“*algo que pincha uvas*”ということになる。これがカテゴリの意味になるがもちろんこの意味はそうではない。この意味は“*los inútiles* 役立たず”である。とするならカテゴリの意味による文字どおりの意味の解釈は打ち切られたことになる。

文字どおりの意味としての解釈が打ち切られると私たちは次に比喩的な解釈へと進む。この比喩的な解釈には前にも見たとおり、カテゴリの意味とは別の情緒・感覚的意味、スクリプト的意味が関わってくる。まずは *pinchauvas* という単語のもつスクリプト的意味が、指示物の動作をあらわすというVN複合語の形態的特徴から私たちにその動作に伴う一連の場面を思い起こさせる。するとこの *pinchar uvas* という一連の動作のスクリプト的意味は、次に私たちにその動作のもつ情緒・感覚的意味を引き起こし、その意味するところの *los inútiles* という言葉のもつ情緒・感覚的意味と私た

ちの頭の中で結びついて、このメタファの理解を達成するのである。つまりこの比喩は、最終的には情緒・感覚的意味による類似性に支えられた比喩であると考えられる。しかしその類似性を発見する過程に、V-N複合語の持つ形態的な特徴から、スクリプト的意味が関係してきているということも重要である。最終的には、情緒・感覚的意味の類似性に支えられた隠喩であるが、動作のもつスクリプトとそれに伴うスクリプト的意味が類似を発見する手助けをしていると考えられるであろう。

もう一方の、表される動作が想像的であるという *chupatintas* タイプの意味の派生も、先に見た派生の仕方とほぼ同じである。ここで表される *chupar tintas* という行為は、誰かが実際にやった行動ではなくこの比喩の創造者が頭の中で作りあげたものである。この比喩の最初の創造者は、実際に事務員がインクを吸う姿を見たわけではなく、比喩で表そうとする対象となった事務員とインクを吸うという行動の間に類似性をみとめ、情緒・感覚的意味における一致を頭の中で発見したということになる。

## 7. 結論

このようにV-N複合語を考えていくと、その意味は命名タイプとメタファータイプに分けることができる。そしてその意味の産出過程は、情緒・感覚的意味、スクリプト的意味からの類似性の発見・認識であることをみてきた。ここでもうひとつのV-N複合語の意味は換喩ではなく隠喩に基づいているといえるだろう。とするとV-N複合語の意味は以下の2つに分類できる。

◎命名タイプ—*abrelatas* (缶切り), *sacacorchos* (コルクの栓抜き), *tocadiscos* (レコードプレーヤー), etc.

◎メタファータイプ—*pinchavas* (役立たず), *chupatintas* (事務員), *saltamontes* (バッタ), etc  
最後に、それではどうしてこのようなメタファを用いるのか。この意味の産出がどのような効果、役割を持つのかを考えてみる。

先の図でも示したとおりメタファーの理解、処理には労力がかかる。しかしそれでも事務員をあらわそうとするときにわざわざ *chupatintas* を用いるには、何らかの理由があるといえるだろう。それはこれら2つを話し手/聞き手の頭の中で一度対比させて、その類似性を探させるということを通じて、話し手は聞き手に *chupatintas* に伴う情緒・感覚的意味、スクリプト的意味を伴って事務員という意味を伝えることを目的としているからである。ただ単に事務員というだけでなく、それに新たな情緒・感覚的意味を付け加えて相手に伝えているのである。

このように考えていくとメタファーには楠見の挙げているもう一つの役割があることになる。楠見はメタファの役割として2つ挙げたがそれにここではもうひとつの役割を付け加えたい。

—既知のものを未知またはそれに近いものであらわして、既知の知識の修正をする  
ということである。言い換えれば、“ぶどうひろい *pinchar uvas*”, または “インク吸い *chupatintas*”

などといった、聞き手にとってまったく斬新な、未知あるいはほぼ未知に近い表現をとおして、既知のものに新たなイメージを付加するという役割である。

V-N複合語の、あるものの動作、機能をあらわすという形態的な特徴から、あるものを命名するというのに適しているというのは一つの大きな意味的特徴である。更に加えてその生産性の高さから、メタファーとしての意味の派生が容易になるということもその意味的特徴であろう。そしてその比喩的な意味を支えているのは、私たちの頭の中での情緒・感覚的意味の類似の一致に基づいた隠喩であるといえる。しかしその類似の発見の過程に、形態的な特徴からスクリプトの意味が大きく寄与しているということも重要な点である。

#### 参考文献

- Alberto Miranda, José : “La formación de palabras en español”, Ediciones Colegio de España, 1994.
  - Alvar Ezquerro, Manuel : “La formación de palabras en español”, Cuadernos de Lengua Española, ARCO/LIBROS, S,L, Madrid, 1993.
  - Bustos Gisbert, Engenio : “La composición nominal en español”, Publicaciones de la Universidad de Salamanca, 1986.
  - Lang, M.F. : “Spanish Word Formation”, Routledge, London, 1990.
  - Lloyd, P.M. : “Verb-complement compounds in Spanish”, Max Niemeyer, 1968.
  - Matthews, P.H. : “Morphology”, second edition, Cambridge Univ.Press, 1974.
  - Spencer, A. : “Morphological Theory”, 1991
  - Tato G. -Espada, Juan-Luis : “Semántica de la metáfora”, Publicaciones del Instituto de Estudios Alicantinos, 1975
  - Varela, Soledad edit. : “La formación de palabras”, Taurus, Madrid, 1993.
  - Ynduráin, Francisco : ‘Sobre un tipo de composición nominal, verbo+nombre’, “Presente y Futuro de la lengua española, Vol.2”, 1964.
- 影山太郎『日英比較 語彙の構造』東京：松柏社，1980
- 「日英語の語形成」『講座日本語学』東京：明治書院，12巻，1982
- 楠見孝「カテゴリとメタファ」『数理科学3月号』東京，1988
- 「メタファーの認知モデル」『数理科学1月号』東京，1989a
- 『比喩の処理過程と意味構造』東京：風間書房，1995

- 佐藤信夫『レトリック感覚』東京：白水社，1978
- 『意味の弾性』東京：岩波書店，1986
- 『レトリックの消息』東京：白水社，1987
- 『レトリックの記号論』東京：講談社，1993
- ジョージ・レイコフ，マーク・ジョンソン 『詩と認知』東京：紀伊国屋書店，1989
- 瀬戸賢一『認識のレトリック』東京：海鳴社，1997
- 高垣敏博「現代スペイン語における複合語の構成」『京都産業大学論集』13巻第3号，1984
- 「語形成の日西対照」『日本語とスペイン語の対照言語学的研究1』国立国語研究所，1992
- 中村明 編『比喩表現辞典』東京：角川書店，1977
- 並木宗康『新英文法選書第2巻 語形成』東京：大修館書店，1986
- 山梨正明『認知科学選書11 比喩と理解』東京大学出版会，1988
- 安井稔『言外の意味』東京：研究社，1978